保護監視活動

マリンパークから掛川市の市境までの海岸を８つに分け、監視員がそれぞれ担当する。早朝と夜の１日２回、雨の日でも巡回する。

カメが上陸した足跡を発見すると、産卵していないか確認する。産卵していれば、砂を掘り起こし卵を保護する。卵はすぐにふ化場へ運ばれる。

仕切りの中に深く穴を掘り、その中へ卵を丁寧に移していく。卵からかえった子ガメは、監視員が夜、海岸へ放流している。

砂浜が減少していることを受け、地元サーファーたちと堆砂垣づくりに取り組んでいる。そのほか、巡回中にゴミ拾いなどもしている。

リや小貝などを目当てに小魚が集まり、それを追ってカツオが群をつくり漁場となる。流木にアカウミガメが乗っていたり、その付近にアカウミガメが泳いでいたりすることが多いため、そうした言葉が生まれた。本市漁業従事者は、アカウミガメを「大漁の導師」とか「豊漁の神様」などと敬愛する。カメがつかまっていた流木を、豊漁の縁起物として床の間に飾る人もいるほどだ。こうした背景から、御前崎では死んだウミガメが海岸に打ち寄せられると、お墓を造って供養する習慣もあった。このお墓は「亀塚」といわれ、今も市内各所に実在している。

全国的にも有名な和菓子「亀まんじゅう」。かめや本店（池新田）の初代店主笠原良一さんが、この地域の砂浜に上陸、産卵するアカウミガメにちなんで、縁起もののカメをかたどったまんじゅうを作り、店先に飾ったのがルーツだという。

私たちのまちでは、昔からカメを大切な存在として扱ってきた。そして今、自慢できるまちの名物にもなっている。

唯一無二の教育も

保護活動への理解を深めてもらうために毎年実施している産卵観察会や放流観察会。実際にウミガメの産卵を見たり、子ガメに触れたりすることで、命の大切さやカメを守ろうとする気持ちを育む機会を提供している。

御前崎小学校では、ふ化が遅れた子ガメを保護監視員から預かり、飼育している。この活動は、昭和52年以来、30年以上続いている。全国でもこうした例はなく、子どもたちは貴重な体験をしている。

御前崎中学校は毎年、アカウミガメが上陸する時期になると産卵地の御前崎海岸を清掃している。「亀バックホーム大作戦」と名付けられたこの活動は、昭和45年の開校以来、ずっと続けられている。

子どもたちは、このまちでしかできない体験を通して、命の尊さや自然を守ろうという気持ちを育んでいる。これもウミガメが、この地に授けてくれた一つの宝物といっても過言ではない。

カメは、子どもたちや地域の誇りにもなっていた

カメは僕たちの自慢。ゴミ捨てないで

亀バックホーム大作戦

全生徒が流木やペットボトル、空き缶などを拾い集める。生徒会環境委員長の松尾一君（西側区）は「カメは僕らの自慢です。人間が出したゴミで産卵地が汚れるのは悲しいです。一人ひとりがゴミを出さない努力をしてほしいと思います」と話す。

飼育で命の大切さ学ぶ。御小や地域の誇り

子ガメ受け入れ

カメの飼育

子ガメ受け入れ飼育に励むのは５年生。５年担任の市川貴千先生は「子どもたちは、休日でも当番でカメの世話をします。この活動を通じて、命の大切さを学ぶことができます。飼育は御前崎小の誇りであり、地域の誇りにもなっています」と話す。